

技術開発完了報告

関東森林管理局

課 題	コンテナ苗による広葉樹造林技術の開発				開発期間	平成16年度～平成22年度			
開発箇所	茨城森林管理署 252林班外	担当 部署	森林技術センター	共同研 究機関	森林総合研究所	技術開 発目標	(2) (4)	特定区 域内外	
開発目的 (数値目標)	ブナ科、カバノキ科、ニレ科等の広葉樹樹種について、ハウスを用いたコンテナ苗の育成技術を開発する。また、コンテナ苗の貯蔵、輸送、運搬などの取扱い技術、植え付け技術を開発する								
実施経過	<p>○平成16年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実験施設の整備 2. ケヤキ、コナラの育成試験 3. ケヤキ苗の育成試験 <p>○平成17年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ケヤキ育成試験(2年目) 2. ケヤキ苗植栽 525本(252た林小班) 206本(23ろ林小班) 全苗木にN0添付 <p>○平成18年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ケヤキ苗の植栽育成試験 2. 植栽ケヤキの活着調査・成長調査 3. 下刈 				<p>○平成19年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 成長量調査 2. 下刈 3. 塩那管理署部内において採種したものの育苗試験 <p>○平成20年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 成長量調査 2. 下刈 <p>○平成21年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 成長量調査 2. 下刈 <p>○平成22年度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 成長量調査 2. 下刈 3. 成長量データの分析 				
開発成果等	<ol style="list-style-type: none"> 1 育苗施設の製作およびコスト計算 48.6㎡(5.4m×9m)のビニールハウス(コンテナベンチを含んだ材料費：約60万円)で、最大84個のコンテナが設置可能であり、150cc(40本)が3,360本、300cc(24本)は2,026本の育苗が可能である。 2 植付 コンテナ苗の植付には、①プランティングチューブ、②ディブル、③スペードが用いられており、苗木の種類、土壌や笹等の根系、傾斜など、苗木の形状や植付箇所に適した器具の選定が重要である。 なお、プランティングチューブはその植付方法から、チューブを通過できる苗木に限られる。 3 苗木の小運搬 根鉢のコンテナの形状を保つために田植用の苗籠を使用した。 4 コンテナの容量別(150ccと250cc)の成長量比較 150ccのほうが成長が良好であるがその要因は断定できなかった。しかしながら、普通苗程度の樹高の苗木を育苗、植付した場合は150ccが250ccに成長で劣るということはないという結果を得た。 5 貯蔵の結果 ハウス内に150ccと250ccのコンテナ苗を貯蔵して成長量を調べた結果、250ccのコンテナ苗のほうが良好であったことから、大苗の生産にはやはり容量が大きい方がよいと考えられる。 6 コンテナ苗によるケヤキ人工林の造成(現在、7年生) <p>(普及啓発等)</p> <p>平成21年度：視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・茨城県林業技術センター ・中越森林管理署(NPO法人同行)外 <p>平成19年度：視察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福島森林管理署(宮城県農林種苗農業協同組合同行)外 <p>平成18年度：「低コスト新育苗・造林技術開発事業」(林野庁委託事業(受託機関：林業機械化協会))において、育成ベンチや播種および移植用ディブルの設計や開発に協力。</p> <p>※開発期間中においてもコンテナ苗の普及に貢献してきたところである。</p>								

